

平成 18 年 11 月 4 日

北関東会場

於：シムックス

中斎塾準備フォーラム 講話

儒学の中には、朱子学とか陽明学と言われるものがありますが、私がお勧めするのは陽明学です。

その理由は、陽明学は行動の学問だからです。

行動しなければ、肝心なものは自分の腹の中にずっしりと入ってきません。

日常生活に役に立たなければ、学問とは言いません。

本だけ読んでいて“なるほどな”と思う。

これはこれで悪くはありませんが、よく読みこなしていけば、いつかは行動に出ます。

ただいつかを待っているうちに、命が亡くなってしまっただけでは困りますので、先ず行動する。

行動して考え、行動して考える・・・この繰り返しで行くと良いでしょう。

それを王陽明が、陽明学の中で「知行合一」と表現しています。

「知行合一」を、「知るは行いの初めにして、行は知るの成れるがなり」と表現します。

まず行おう、これが肝心です。

陽明学が日本に伝わって、中江藤樹が日本における陽明学の祖と言われます。

陽明学の学縁につながる者として、佐藤一斎がいます。

佐藤一斎は江戸時代の大儒学者で、佐藤一斎のお弟子さん・孫弟子さん達が明治維新を成
功させたと言われていています。

佐藤一斎のお弟子さんには、山田方谷と佐久間象山がいます。

山田方谷のお弟子さんには、三島中洲・河井継之助がおり、佐久間象山のお弟子さんには、
吉田松陰と小林虎三郎がいます。

番外で西郷隆盛がおります。

そして佐藤一斎の孫娘コトが嫁けた人が、吉田茂です。

今我々が学んでいるのは、佐藤一斎の学問を山田方谷が受け継ぎ、それを三島中洲が受け
継ぎ、山田齊斎が受け継ぎ、石川梅次郎が受け継ぎ、私深澤賢治が受け継いでおります。

そのご縁を皆様方にご紹介しているわけですから、縦軸で繋がっているとお願い下さい。

連綿として繋がっている学びの縁の中で、今皆様方にお話させて戴く機会を得たと思っ
ています。

そして今ここにおられる方は、横の縁が広がり始めたのご理解下さい。

ではレジメの本日の講話に参加します。

素読の体験をして戴きます。

学問をする時に、明治・大正・昭和初期の教養人が、自然と身に付けた勉強の仕方に素読があります。

素読は、自然に身体に入ってきます。

論語の一節です。

「学ばざるは則ち罔く、思わざるは則ち殆し」

素読をする時に、基本的なルールがあります。

まず、背筋を伸ばす。

姿勢を正すことです。

次に、目線を定める。

自分の目的を明快に定めた時には、エネルギーが生じます。

陽明学では、「志を立てたら一流である」という言い方をしますが、志を立てるという事は、目線を定める・将来の目的を定めるという事です。

具体的に素読の時には、目線を若干上に持って下さい。

三番目は、気持ちの良い声を出す。

できるだけ自分の気持ちを入れた、大きな声を出して下さい。

では、参加します。

「学ばざるは則ち罔く、思わざるは則ち殆し」(素読)

皆さんは今ここで話を聞いたり、色々な場で学ぶ事があると思います。

その時に何の為に学んでいるのか、自分で考えることが肝心です。

使命感と一緒に伴わないと、学びは単なる知識・雑識に陥る。

学ぶ時に、どういう使命感を持って学ぶのか、どういう人生哲学を持って学ぶのか、それが大きな問題です。

自分の使命感がなく学んでいると、人様を間違った方向へ追いやってしまう。

そして学んだら、<省>の時間を持って、学んだものを見直すと良いでしょう。

何度も申しておりますが、渋澤栄一さんの<三省>を、お話し致します。

渋澤栄一さんは常に論語を、小さな本に書き写して、自分で書いて持ち歩いていました。

常に自分の目の前に来たものは、利によりて持ち込まれた案件なのか、我欲で言って来たものなのか、社会の役に立つものか否かを判断していたという事です。

渋澤栄一さんは誰かと再会した時に、「いつ頃お会いしたか」「こんな事を言っておられた」・・・という事がすっと浮かんでくる、とその記憶術が喧伝されています。

何故それができたか、ご本人の自己分析したものが残っております。

夜寝る前に、必ずその日一日あった事を思い出すのだそうです。

どなたにお会いして、どういう約束をしたか・・・という事をずっと思い出して、一つ一つ腑に落ちてからでないといと眠りにつけなかったそうです。

それを習慣づけていたそうです。

これは安岡正篤先生の書籍シャワーと同じですね。

安岡先生も、俗人と話をする心と心が疲れるので、家に帰ったら書斎に入って書物のシャワーを浴びるという事が、やはり習慣になっていたようです。

「子曰く、性相近し、習い相遠し」(素読)

人間生れ落ちた時は、ほとんど能力は同じです。

ところが日常生活に身に付けた習慣によって、どんどんその差は広がっていくものです。何も勉強しない方と比べて、日常生活の中に自分の良しと思う習慣を身近なものにしていくと、それを毎日実践していく事によって差がついて、最終的に自分の願った目的に近づく事ができます。

陽明学は行動を重視する学問です。

目標を定める事の重要性を説く学問、体験する学問だと思って下さい。

では、これらをベースに考えて、次の「今の日本、これからの日本」を考えます。

今の日本は「知足」がなさ過ぎます。

ほどほどで良いという事を忘れてしまった。

あれも欲しい・これも欲しいという気持ちが全面に出すぎています。

俺が、俺が、という気持ちが出すぎるので、今の教育の荒廃があるし、拝金主義が広がっているのです。

今の日本・これからの日本の考える時には、視点として、「俺が、俺が・・・」になっているかいないか、「自分だけ良ければよい」という考えになっているかいないか、そういうものを具体的に自分の身に付けて戴ければ良いと思います。

こう考える時に、私は判断の三原則を用います。

<本質・大局・歴史> です。

本質は何か、を詰めていく。

何故？ 何の為に？

・・・それをずっと掘り下げると、自分自身の人生哲学にぶつかるはずで

「自分の人生如何に歩むべきや・・・」につながります。

大局は色々な立場の人の目線で見ると

熱気球に乗ってふわりふわり飛んでいくと、普段は目に入らないものが見えてきます。

全体が見えるようになるから、自分がいたポジションも俯瞰的に見る事ができます。

歴史を考える。

例えば今の教育がどうしてこういう事になったのか、歴史で考えますと、終戦直後のGHQのスリーエス政策に端を発するとも言われます。

昭和20年にGHQが何をしたか、何を考えてどういう指令を出したか、それによって日本の教育が大きく変わってきたのだ、というものを見ると良いと思います。

このように「今の日本・これからの日本」は、<本質・大局・歴史>の三点で見直すと良いと思います。

今の日本については、十分皆さんもご承知ですが、これからの日本を考えるにあたってネバダレポートがあります。

ネバダレポートについては、何度もお話しを致しましたので皆さんもご存知ですね。

私は昨年、『陽明学のすすめ』という本を書きました。

その中で、元日銀の上におられた方にお会いして、お話しをお聞きした事が書いてあります。

7、8年前になりますが、その方に「その内に日本はインフレになりますね」とお聞きした所、

「今の日本は、油の入ったドラム缶があって、その傍らに薪が山のように積み重ねられている。そして側にライターを持った人間が立っているような状況である」と言っておられました。

その次にお会いした時には、2、3年前になりますが「もうそろそろハイパーインフレが起きますね」とお聞きした所、

「はいそう思います。日本の経済動向を良く見続けていけば、ハイパーインフレがいつ起きるかがわかります」と言われました。

一部の人達は、日本がひっくり返るという事を前提に行動しています。

それは、より危機感を持った人です。

危機感を持っていない人は茹で蛙で、ゆっくりゆっくりと炙られていって、気が付いた時にはもう間に合いません。

それを自分なりにはっと気が付いて行動に移る。

今その時期に来ています。

その機に来たという事に、どこかで実感した人は、必ず行動に移る。

その思いが強ければ強いほど、行動に移ります。

そうお考え下さい。

これからの日本はハイパーインフレが起きます。

ハイパーインフレが起きると何が起きるか・・・世の中に沢山出ていますから、どうぞご覧戴きたい。

それを見るのには日々の生活習慣を磨く、実体験の素晴らしさ、実体験を意識してとる事です。

それらを貫くものは、自分の将来目的・目標をどこに置くかです。

どうぞ、ご自分の人生哲学をお作り戴く。

それをお願いして、本日の講話を終了させて戴きます。

有難うございました。

付録 幹事会での講話

<十牛之図> 解説

お手元の資料をご覧ください。

「尋牛」

「たづねゆく みやまの牛は 見えずして ただ空蝉の こえのみぞする」

何か行動をしたいのだけれども、どういう行動をしたらいいのか分からない。

しかし何か行動したいのだ・・・と思い始めた時が「尋牛」です。

「牛」は、悟りです。

悟りたい・行動したい・何かをしたい・・・切実にそう思い出した時が、第一段階の「尋牛」に入ったと思って下さい。

「見跡」

「ころざし 深きみ山の かいありて しおりのあとを 見るぞうれしき」

こういう本に出合えて良かった、こういうお師匠さんに出合えて良かったとつくづく思う。

そうするとそれをもっともっと深く掘り下げて考えてみたい。

本であれば、その方の書いた本をもっともっと探して読みたいと思う。

そういう手がかりがつかめて嬉しい。

もっともっとという気持ち、憤という気持ちが沸き起こってきた時、手がかりがあって憤が生まれた状態が「見跡」です。

「見牛」

「吼えけるを しるべにしつつ あら牛の かげ見るほどに 尋ねきにけり」

自分の人生観がだんだんおぼろげながら見えてきた。

私の人生はこちらの方向に進めば良いのだと思い始めてきた。

実際に行動してみると、その度毎に腑に落ちる事がいくつもいくつも出てくる。

腑に落ちるものが深まってくると、悟りと言います。

小さな悟りがいくつも積み重なって、ある日突然葉っぱが一片ひらひらと落ちるのを見て、“ああ、秋だな・・・”としみじみ思える心持ちになってくる。

これが「見牛」の段階です。

自分の人生観がこれだと、人様に話せるようになってきた。

自分がほれ込んだ本・師匠の影が、実際に見えるように感じる。

一つの資料を見た時に、その書いた人の息遣い、筆遣い、呼吸すら自分のものになって一体化したような感じが出てくる。

師匠の後を追っていくと、呼吸が自分のものになってくる。

言葉を聞くだけで、偉大なる人格が身に迫ってくる。

そういうものが身に沁みてしみじみ感じる時に、自分の人生観・人生哲学がこれで良かったとしみじみ思える瞬間が、「**吼えけるを しるべにしつつ あら牛の かげ見るほどに 尋ねきにけり**」です。

師匠の影が見える。

ここまで私は尋ねて来たのだ。

私の歩く道は間違いないぞ、自分の人生これで正しい、としみじみ思える時が「見牛」です。

本日は十牛之図の第三段階「見牛」解説をさせて戴きました。

有難うございました。